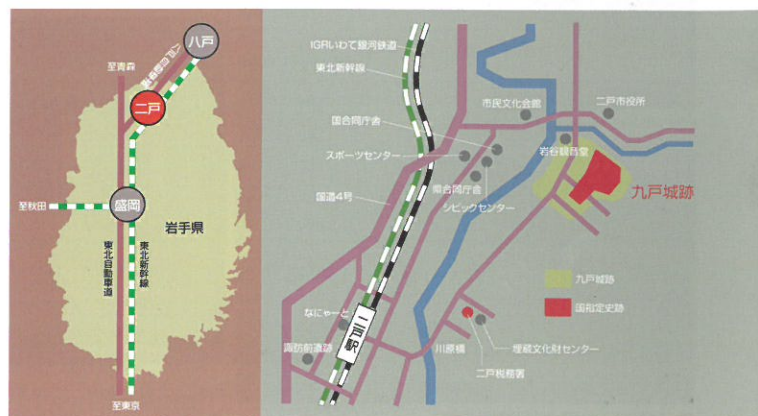


表紙写真解説

●本丸南側堀跡の野面積みの石垣です。史跡九戸城跡の石垣は、九戸一揆後に蒲生氏郷ら奥羽再仕置軍によって普請されたと考えられています。



「続日本100名城」と御城印

●史跡九戸城跡は、著名な歴史の舞台であり、地域の代表である名城であると評価され、平成29年(2017)に(公財)日本城郭協会から「続日本100名城」に認定されました。

平成30年(2018)から、選定された城を巡るスタンプラリーが全国一斉にスタートしました。

九戸城の御城印は九戸氏菩提寺の長興寺や、ゆかりある九戸神社の社寺紋「九曜紋」があらわれています。



●スタンプ設置場所

九戸城ガイドハウス：10時～15時

二戸市埋蔵文化財センター：9時～17時

●御城印販売場所

二戸市埋蔵文化財センター

九戸城跡のガイドについて

●利用時期：4月～11月

●利用時間：10時～15時

※1週間前までの予約が必要です。

予約連絡先

二戸市観光ツーリズム協会

0195-23-3641

●史跡の保護・保全にご協力ください。

●ゴミは必ずお持ち帰りください。

●芝生内での犬の散歩をご遠慮ください。

●木竹の伐採はご遠慮ください。

●火気の使用はご遠慮ください。

二戸市教育委員会事務局教育部文化財課

〒028-6101

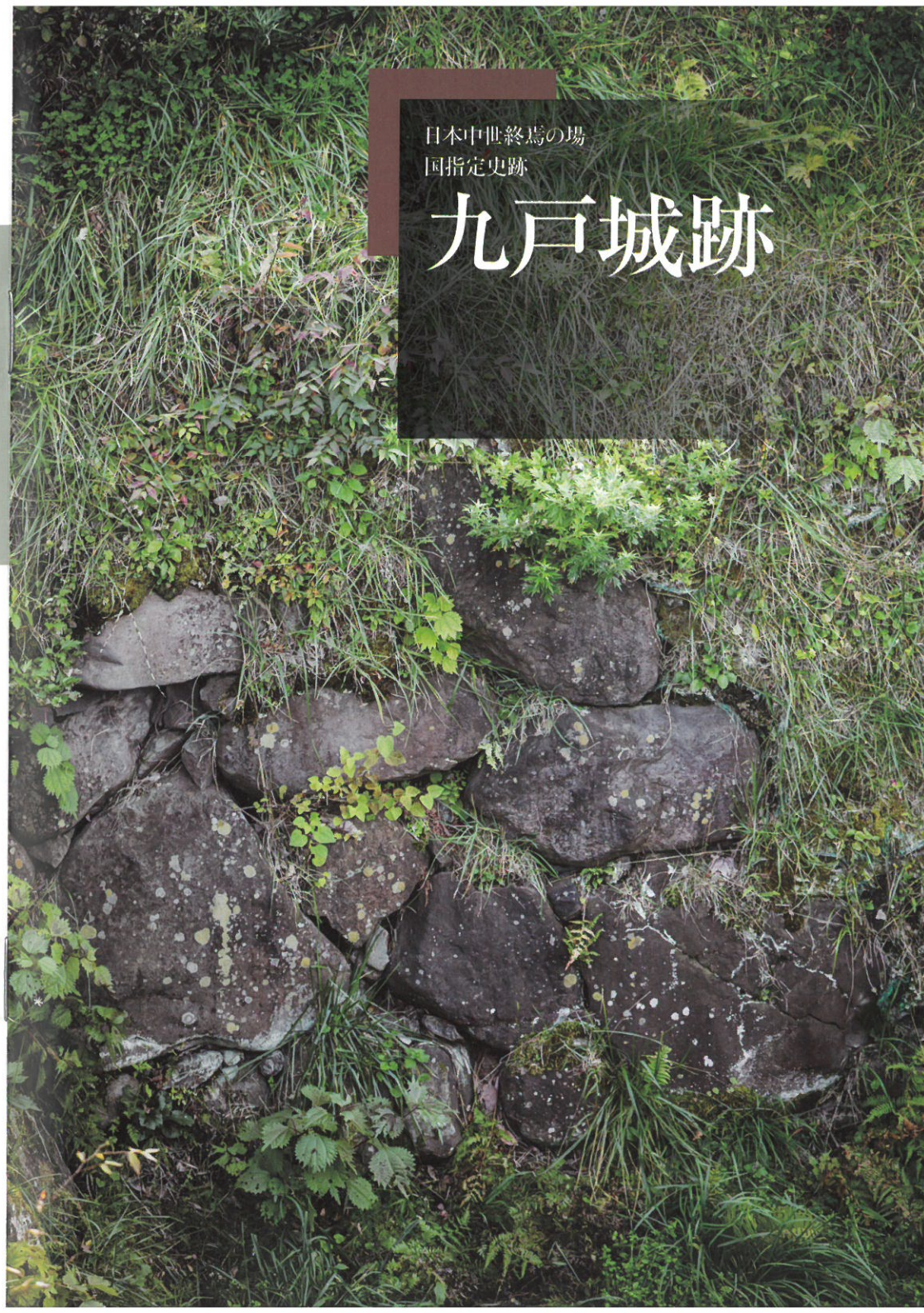
岩手県二戸市福岡字八幡下11-1

TEL 0195-23-8020

FAX 0195-23-8044

日本中世終焉の場
国指定史跡

九戸城跡



よみがえる古城

豊臣秀吉による奥羽再仕置によって、日本中世終焉の場となった九戸城は、発掘調査で現代によみがえる。

中世城館から近世城郭へ

九戸城は、明応年間（1492～1501）から寛永13年（1636）まで利用された城郭で、本丸・二ノ丸・三ノ丸・若狭館・石沢館（外館）・松ノ丸の曲輪^{くるわ}から構成されています。

天正19年（1591）に奥羽仕置への反発から起こった九戸一揆を境として、中世城館である九戸氏時代の九戸城は、南部氏時代の福岡城へと造り変えられました。

九戸城期は、二ノ丸の発掘調査成果から、曲輪の中心部には掘立柱建物、曲輪の縁辺部には堅穴状遺構が配置されていたことが判明しています。堅穴状遺構は、埴塼や漆塗り工具である二枚貝パレットなどの出土遺物から、工房や倉庫として使われたと考えられています。また、若狭館・石沢館は、自然地形をそのまま利用して曲輪が形成されており、石垣や土塁が見られないことから、九戸城期の姿を留めている曲輪であると推定されます。

※土塁や堀などで囲まれ、平坦化された城を構成する区画で、郭・廓とも書く。



史跡九戸城跡（令和6年西から撮影）

南部氏時代の福岡城は、奥羽再仕置軍によって、野面積の高石垣が普請され、同時に本丸・二ノ丸・松ノ丸に土塁、枳形虎口が築かれました。近世城郭^{のづらづみ}と中世城館の曲輪構造の違いは、江戸時代に描かれた九戸城古絵図でも確認することができます。

豊臣秀吉の天下統一以後に築かれた城は、軍事的な目的だけでなく、本丸を頂点とした曲輪配置によって、御殿や天守、石垣といった構築物が築城者の権威を示す意図をもって築かれました。

九戸一揆鎮圧の直後は、奥羽仕置前後に南部氏家臣とされた国人領主たちが、いつ一揆を起こすかわからない状況でした。石垣をもつ福岡城への普請は、豊臣政権を背景とした南部氏の築城者の権威を示し、地域社会の安定化を図る意図があったと思われます。九戸城から福岡城への変化は、中世から近世への社会変化を物語るものと言えます。

※織田信長の安土城から江戸時代にかけて築かれた石垣や天守を持つ城



九戸城古絵図（部分／二戸市教育委員会蔵）

福岡城の廃城と明治以降の九戸城

福岡城は、南部氏の本城が盛岡城へ移ると南部利直の長子である経直が城主となります。経直の死後、城代が置かれたのち、寛永13年（1636）に廃城となりました。

明治になると城域が開墾され、農地として利用されるようになります。明治26年（1893）には、国分謙吉によって、私設農事試験場が城内に設置され、化学肥料を使用した作物の栽培や馬、肉牛、乳牛、綿羊^{めんよう}といった家畜の飼育が行われていました。

Summary

Kunohe Castle covers 36-hectare area and consists of several kuruwa (leveled off areas of land in a castle enclosed by earthen walls and moats) including the main Honmaru, the secondary Ninomaru, the tertiary Sannomaru, Wakasadate, Ishizawadate (the outer compound), and Matsunomaru.

The castle, which is the site of the final battle fought during the second Ouu Shioki, forceful administrative restructuring of the Oshu region, can be roughly divided into two eras.

The first is the era of Kunohe Castle. Its use as a castle is said to have started after the seventh generation Kunohe Mitsumasa obtained a domain in the Ninohe region (1492-1501) and relocated from the current Kunohe Village.

The other is the era of Fukuoka Castle when it became the residential castle of the Nanbu clan after the second Ouu Shioki in 1591.

In the castle compound, the Honmaru, Ninomaru, and Matsunomaru were rebuilt to form a modern Castle. The Honmaru was renovated and became a castle with high stone walls, which was rare in Tohoku back then.

天然の要害に築城された九戸城

九戸城跡散策ガイド

九戸城は、馬淵川と支流白鳥川・猫淵川を外堀とし、その河岸段丘上に築城された天然の要害だった。



九戸城跡案内図



①三ノ丸

三ノ丸は、本丸・二ノ丸・松ノ丸の西側に位置し、本丸との間は、堀と土塁によって仕切られています。本丸との比高差は約20メートルあり、曲輪のなかで最も低い位置に築かれています。



②二ノ丸切岸（深田堀）

敵の侵入を阻む目的で人工的に斜面を削って作られた断崖です。二ノ丸南側の深田堀は、高低差が約10メートルあります。



③二ノ丸

本丸の東から南を囲むように配された曲輪です。本丸の約3倍の広さがあり、南に大手虎口、北東に搦手虎口があります。



④本丸南側堀の石垣

東北最古といわれる石垣は、天正19年(1591)の一揆後に再仕置軍によって築かれました。南面(本丸側)が「布積み崩し」、北面(二ノ丸側)が「乱積み」の石垣となっており、「築き方」に違いが見られます。



⑤本丸南虎口

本丸南側に開かれた虎口で、東西約20メートル、南北約25メートルの方形をした喰い違い虎口です。



⑥本丸南東隅櫓

敵情視察や射撃のために設けられた施設で、東西約7メートル、南北約7メートルの規模があります。



⑦本丸

本丸は、L字状の上下2段の段差によって区画され、土塁には石垣が残されています。発掘調査によって石階段や立石群、掘立柱建物跡などの遺構が整備されています。



⑧古碑群

明治26年(1893)に私立國分農事試験場が城内に創設されたことを記念した碑やローマ字の創始者田中館愛橘のローマ字九戸懐古詩碑などの九戸城に関係する石碑があります。

発掘調査による成果

平成元年から始まった発掘調査から、九戸一揆後の再普請によって豊臣政権や南部氏の権威を示す「見える城」として本丸・二ノ丸が築かれたことが明らかとなった。

発掘調査で見えてきた新事実

●——本丸

本丸平場は、福岡城を普請する際に、九戸城期の曲輪の高さから盛土造成されていることが確認されました。本丸に残されている堀跡、石垣、隅櫓跡、追手虎口や南虎口などの遺構は、福岡城期に築かれたものです。

本丸平場は、上下2段の段差によって区画されています。上段平場への出入口は、追手門裏手平場の門跡、段差境中央の石階段、南虎口側の通路状遺構の3カ所が確認され、身分や用途によって出入口が使い分けられていたと推定されます。

本丸の追手虎口は10メートル四方の枡形虎口で、櫓門の礎石や正面の堀底からは、木橋に伴う柱穴痕が検出されています。

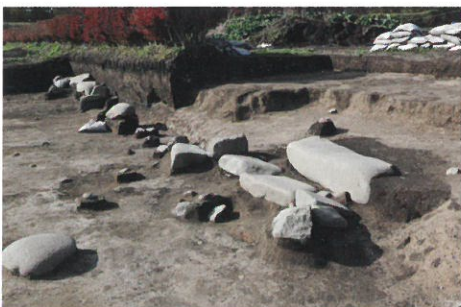
●——二ノ丸

九戸城期は、二ノ丸東側上段平場が段差境付近に掘られた薬研堀※によって独立した曲輪であった築城期と、堀が埋められ現在の二ノ丸の姿となった改築期に分けられます。

築城期には東側上段平場が独立した曲輪として機能しており、虎口である門跡、櫓跡、曲輪中央に掘立柱建物、大型の堅穴状遺構、縁辺部には小型の堅穴状遺構が配置されていました。小型の堅穴状遺構からは、金属を溶かすために使用する坩堝が出土していることから鍛冶にかかわる遺構と推定されます。 ※V字状になった底の狭い堀



本丸追手門礎石（平成8年）



本丸石階段（令和元年）



二ノ丸東側下段平場境の薬研堀（平成22年）

改築期には、虎口である門跡が廃棄され、中心的な建物が北側に移動し、鍛冶を行った堅穴状遺構に代わり、収納施設と推定される小型の堅穴状遺構が縁辺部に並びます。下段平場の堀が埋め戻され現在の二ノ丸の姿となります。

福岡城期には縁辺部に土塁が築かれ、二ノ丸大手、搦手に虎口が築かれました。二ノ丸大手虎口は、長さ48メートル、幅7.8メートルあり内門と外門を備えたものであったことが判明しています。虎口内部は緩やかな登坂となっており、床は白色火山灰が敷かれていたことが判明しています。



二ノ丸土橋石垣（令和2年）

●——三ノ丸

三ノ丸には、縁辺部に残存する土塁が、大規模な版築によって築かれたことが判明しています。土塁構築土内から出土した天目茶碗から福岡城期の土塁と考えられています。また堀の延長部も調査によって確認され、三ノ丸と城外が堀によって仕切られていたことが判明しています。

また、二ノ丸と家臣居住地である在府小路を結ぶ土橋には、本丸同様、野面積によって石垣が築かれていることが確認されています。

調査成果から本丸と二ノ丸が一体として整備されたことが明らかとなっています。



坩堝、とりべ



二ノ丸大手虎口（平成30年）



発掘調査によって確認された三ノ丸の堀跡（平成27年）

九戸政実の大義

後世、政実とは「力が正義」の戦国時代において、「正義が力」の大義を貫き、一族を守ろうとした奥州一の武将といわれた。

◆南部の二大勢力

鎌倉時代の初めに発祥した奥州南部氏は、15世紀末頃には現在の岩手県北から青森県東部にまたがる日本最大の郡「糠部郡」を支配していました。古文書に「奥州ぬかのふ(糠部)なんふ(南部)一族」とあるように、宗家の三戸氏(南部殿)を盟主とし、一戸・四戸・七戸・八戸・九戸の諸氏による一族の連合体(一揆)を形成していたとみられ、それぞれが家臣と領土を支配する独立した領主でした。

九戸氏は南部氏始祖南部光行^{みつゆき}の6男である行連^{ゆきつら}を初代に九戸氏を名乗ったとされています(別に小笠原氏と称していたという説もある)。15世紀末頃に九戸から二戸へ進出したと考えられています。九戸政実^{まさみ}は、九戸氏の11代目として誕生したと伝えられています。

天正10年(1582)、三戸南部家24代当主晴政が死去したことで、娘婿の田子信直支持派と誕生したばかりの遺子晴継(25代)を擁護する九戸派が対立、その後、晴継も13歳で謎の死を遂げ、世継ぎ騒動は混迷の度合いを深めていきます。

永禄6年(1563)の室町幕府「諸役人附」の「関東衆」の中に「南部大膳亮」と「九戸五郎」が併記されていることから、南部氏と九戸氏は同格の別族であるという説や、併記は同族並立状態が依然として続いていた

と北奥羽の様相を反映したものとする説もあります。この時代、南部は二大勢力が対立する時代でした。

◆6万対5千の九戸一揆

晴継の謎の死には、信直支持派による暗殺説があり、さらに26代目家督相続を決める重臣会議に政実が招かれぬまま決定されたことなどによって信直と政実の確執は深まっていたが、天正18年(1590)の奥羽仕置で決定的となりました。これまで独立していた在地の領主たちは、豊臣秀吉の命によって信直の家臣となること、城を破却したうえで三戸に集住することが決められたのです。



九戸御陣図(寛文7年/小井田幸哉著「八戸根城と南部家文書」を元に作図)

この決定に不満を持った九戸氏や周辺の領主たちは反発し、信直に味方する者を攻めました。この信直方との戦いは「九戸一揆」あるいは「九戸の乱」と呼ばれています。

当時、奥羽仕置に不満をもった領主や農民たちによって東北各地で一揆が起こりました。各地の一揆を制圧するため、豊臣秀吉は、天正19年(1591)に豊臣秀次を総大将とする奥羽再仕置軍を編成します。再仕置軍は、秀次以下、徳川家康・伊達政宗・石田三成・蒲生氏郷・上杉景勝・浅野長吉・井伊直政・大谷吉継・堀尾吉晴・佐竹義重など、錚々たる武将の名が連ねられていました。

再仕置軍は、二本松通り、相馬通り、最上通りの3方に分かれ各地の一揆を平定し、



大腿骨上部の刀創(東北大学出版会『骨が語る奥州戦国九戸落城』より転載)

仕置のやり直しを行いました。

再仕置最後の戦いの舞台となったのが九戸城です。九戸一揆鎮圧に参加した再仕置軍は、蒲生氏郷、浅野長吉、井伊直政、堀尾吉晴、南部信直、松前慶広、津軽為信、秋田実季などでした。そして9月2日、ついに馬淵川をはさんで、再仕置の上方軍勢約6万人に、九戸籠城軍は約5千人が対峙、熾烈な攻防が始まりました。

◆最後の兵(つわもの)としての政実

九戸軍記によると、9月4日、難攻不落の城に苦戦を強いられた上方軍は謀略を巡らせ、九戸氏の菩提寺長興寺の薩天和尚を仲介に立てました。そして、政実の武勇を讃え、女子供の助命を条件に降伏を説得させました。

謀略とは知らぬ和尚と、一人でも多くの一族郎党を救おうと和睦に応じた政実でしたが、開門した城内には火が放たれ、城内の者は撫切りにされたと伝えられています。また、政実と7人の重臣は豊臣秀次の待つ三ノ迫(宮城県栗原市)で斬首されました。



火縄銃弾丸鋳型(本丸跡出土)

政実関連の史跡を巡る



承和9年(842)の創建と伝えられる九戸地方の総鎮守。九戸氏代々が戦勝を祈願した神社として知られています。



江戸時代後期に書かれた「邦内郷村志」によれば
九戸氏の山荘があった場所とされ、六弁の梅が咲く老
梅が残されています。



三ノ迫（宮城県栗原市）で斬首となった政実公の首級を、家臣がひそかに持ち帰り、鎮めたと伝えられる場所です。



白鳥の「小祝」バス停そばの岩陰に小さな祠が3つ並んでいます。山の神ともいわれますが、地元では政実公のお姫さまを祭った祠と伝えられています。



永正元年(1504)開山の古刹で九戸氏代々の菩提寺としても知られます。境内にある村指定の大イチョウは、政実が出陣の時にお手植えしたものと伝えられています。



姉帯城は、九戸氏の一族とされる姉帯氏の居館と言われています。

天正19年の九戸一揆では、九戸城攻略の前哨戦の戦いの舞台となりました。姉帯氏は、近隣の諸豪族とともに城に立てこもり応戦したものの、大半が討ち死にしたと伝えられています。



亀千代には生存説・謀殺説と共にゆかりの地も数カ所伝えられており、この若宮八幡宮は殺害された亀千代を祭神としています。

九戸城落城時、13歳と伝えられる政実の一子亀千代の殺害場所には三ノ迫(宮城県)、村松(二戸市)の蒲生陣内のほか、「田子照夫家文書」や伝承に田子町佐羽内が挙げられています。

[illegible]